The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」考 : 西行歌との関連
Author(s)	大坪, 利絹
Citation	語文. 1973, 31, p. 52-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」考

――西行歌との関連――

大坪利絹

(一)

この句に関してはすでに数々の論考のある事が、考察の進むにつれて次々と分ってきたのであるが、それにもかかはらず、いはば俳諧研究には全くの素人である自分が無謀にも容喙する理由はただ一つ、この句と西行歌との関連について明確な考察を示したものに接し得ない為であり、逆を言へば西行歌からこの句について言及したものにも接し得なかった為である。そこで西行歌がこの句にどのやうに関連するか、それを説いてみようとするのが本稿の意図であるが、従来この種の問題について説かれてきたのは、いふまでもなく漢詩句との関連である。そして論点は結局この句が漢詩句に基づく虚構か、それとも独自の創作か、あるいは虚構を或程度容認する立場でもたとへば「茶のけぶり」のみは芭蕉の手柄であり創作ではないかなどといふことであった。小論も西行歌との関連を論じながら、所詮論点はここに帰着するであらう。

なほこの句を考察するについて、その前提として次の二点を指摘しておきたい。一は『野ざらし紀行』全文に流れる芭蕉の精神様態であり、二は西行思慕の強さである。この事は、『野ざらし紀行』の伝本によっては段節相互に前後があったり、多少の語句の異同があるが、それを考慮に入れても、まづ不変と考へられるものである。

一に関しては、この紀行には若かりし過去の日と初老の今日との対比より生ずる人生詠嘆の態度が随所に湧出してゐる事と、生死の凝視の結果、人間の宿命を諦観せんとする精神が見出される事の二つを自分はまづ感ぜずには居られない。紀行中の句にこの二つの窺へるものを拾へば、例へば冒頭「野ざらしを心に風のしむ身哉」の句に表出せられた死と対決する心は、やがて「しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮」といふ風に、わが宿命をかりそめの生に見出して諦観に遊ぶ心になり、又「僧朝顔幾死かへる法の松」といふ生死の凝視から絶対者への投身帰依、或いは「命二つの中に生たる桜哉」に見られる生存の凝視は、死によって有限化された人間の宿命を諦観することによって、無限へ解放する営みであり、又「秋十とせ却て江戸を指故郷」には、昔日と今日との対比より生ずる感懐が見られ、年月の深い回想としては「御廟年経て忍は何をしのぶ草」がある。自分は斯様な精神様態が『野ざらし紀行』を一貫して底流するものと見たい。

次に二に関しては西行に対する敬慕の心である。一体芭蕉が西行

に思慕傾倒する様になった時期は何時からであらうか。文字に定着した限りでは、有名な「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利久が茶における、其貫道する物は一なり」とか、「あるは摂政公のながめにうばゝれ、西行の枝折にまよひ」、「跪はやぶれて西行にひとしく」等を載せる『笈の小文』があるが、これは『野ざらし紀行』より後である。『野ざらし紀行』以前では、その前年の天和三年の虚栗跋に「佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也」とある。次に本稿に関係のある西行の「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」の歌を、はっきりと句の面に露呈させた句としては、既に延宝三年に「命こそ芋種よ又今日の月」の句、翌四年に[1]「命なりわづかの笠の下涼み」の句がある。又西行の「津の国の難波の春は夢なれや芦の枯れ葉に風わたるなり」の歌を露呈した句には、同じく延宝五年の「あすは粽難波の枯葉夢なれや」の句がある。思ふに、寛文十二年官を辞し東武に赴いた二十九歳頃には、既に西行思慕の情が深く崩しそれが数年を経て文字に定着され始めたのであらう。『野ざらし紀行』に於ても西行の「深く入りて神路のおくをたづぬればまた上もなき峯の松風」の歌によって「ふかき心を起して、みそか月なし千とせの杉を抱あらし」と詠じ、西行谷に於て「芋洗ふ女西行ならば歌よまむ」と吟じ、吉野に到っては西行庵の跡を訪ひ、伝西行作である「とく〳〵と落つる岩間の苔清水くみほどもなきすまひかな」の歌を露呈して「露とく〳〵心みに浮世すゝがばや」の句を得、思慕の情を注ぐのである。先に触れた「命二つの中に生たる桜哉」の句も勿論『野ざらし紀行』中に見える西行歌露呈句である。

(二)

さて『野ざらし紀行』小夜中山の件りは、あくまで実景実感を基としながらも、それが杜牧早行詩の情景にあまりにもうまく嵌ってゐた為に、それによって俳諧の詩情を打出したとするのが通説となってゐる。

既に、明らかな事の様でもあるが、小論の展開上少しく必要もあるので、自分が考へてゐる早行詩と標題句との関係を対照しておきたい。この際、句を紀行の地の文から剝離させず、その有機的な一部として取り扱ふべきことは言ふまでもない。

①廿日余の月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、②馬上に鞭をたれて、③数里いまだ鶏鳴ならず。④杜牧が早行の⑤残夢、⑥小夜の中山に至りて⑦忽驚く。⑧馬に寝て⑨残夢⑩月遠し⑪茶のけぶり（藤田本）

㋐早行　杜牧

㋑垂鞭信馬行　㋒数里未鶏鳴　㋓林下　㋔帶残夢
㋕葉飛　㋖時忽驚　㋗霜凝孤鶴迥　㋘月暁　㋙遠山横
㋚僮僕休辞険　㋛何時世路平

①は㋐㋒、②は㋑に照応する。もっともこの部分は初稿[2]の天理旧菊本及びその系統をひく『笈日記』所載文、『笈日記』に拠った『三冊子』所載文等では「いと暗く、こまの蹄もたど〳〵しければ、落ちぬべきことあまたゝびなりけるに」となってゐたのが斯く改められたものである。改案の方が杜牧詩に近くてすっきりするが、初案の文句もここでは棄てられてゐるものの、芭蕉は後に『更科紀行』

で、「馬のうへにて只ねぶりにねぶりて、落ぬべき事あまたたびなりけるを」と再活用してゐる所を見ると、彼にとって必ずしも意にそはぬ語句でもなかったらしい。（この場合、『更科紀行』の註者は徒然草四十一段「賀茂のくらべ馬」の「とりつきながらいたう睡りて、落ちぬべき時に、目をさますこと度々なり」が心にあっての事かとするが、[3]寧ろ直接的には『野ざらし紀行』の再活用を指摘すべきではなからうか。）さうしてみると、彼が比較的気に入ってゐた初案の文飾には、杜牧の「早行詩」以外のものが影響してゐたとも考へ得るであらう。③は直ちに㋐に、④は㋑に、⑤は㋒に照応する。⑥は我が国の地名であるから、杜牧の「早行詩」との直接の対応はないのは当然である。[4]⑦は㋓に照応するであらう。（『笈日記』・『三冊子』所載文では「忽」がなく単に「おどろく」のみであるが。）⑧はこの句の推敲過程の通説に従へば、(A)馬上落んとして→(B)馬上眠からんとして・馬上に眠らんとして・馬上眠らんとして→(C)馬に寝て、となるのであるが、それについて杜牧詩によれば㋑の「信馬行」以外に照応は考へ難く、他にもう少し適応する詩句がほしいところである。⑨は㋒に、⑩は㋐の「月」と㋔の「遠」との合成、⑪のみは杜牧「早行詩」にはなく、その為にここばかりは芭蕉の手柄と言はれたり、[5]杜牧の別詩「酔後題僧院詩」を引くとも言はれてゐるのである。[6]ところで自分は、この別詩説に賛成しながらも、さらにそれを補強するために、林羅山の詩と西行の歌とを併せて勘合し、追究しようとするもので、本稿の意図も主としてこの点にある。

（三）

前節で私は『野ざらし紀行』と杜牧の「早行詩」とを比較して、「早行詩」のみでは影響関係を鮮明に解き得ない箇所として、⑥の「小夜の中山」と⑧の「馬に寝て」を挙げた。そこで、その点を明らかにするため林羅山の『丙辰紀行』を援用したいと思ふ。この羅山詩とは、東奥巣居著淡海干当述の「増註　桃青翁句彙（寛政十年刊）」に一部分だけ引かれたもので、該当箇所の全部は次の通りである。

小夜中山　円位法師が「いのちなりけり佐夜の中山」と詠ぜしは爰にての事なり。

Ⓐ坂道升降Ⓑ是早天　Ⓒ夢残馬上不成眠Ⓓ
Ⓔ此山無限Ⓕ西行寿　Ⓖ能使詠歌千古伝

このうち、Ⓐは先に触れた通り『野ざらし紀行』の②の初案「こまの蹄もたど〳〵しければ、落ちぬべきことあまたゝびなり」の理由としてもうまく嵌るから、芭蕉はこの「坂道升降」によって『野ざらし紀行』初案の文飾をはかり、さらに嶮路の「小夜の中山」をも点出しきたったとも考へられるだらう。なほ『野ざらし紀行』に後出する後醍醐廟参詣の件りの「山を昇り坂を下るに云々」とも契合するであらう。ⒸⒹも、㈡節で述べた「馬に寝て」句の推敲過程の(B)によく適ふ。「馬上」「眠からん・眠らん」等は「早行詩」よりは寧ろこの詩に近い。さらにⒺⒻⒼ特にⒻは、前行する和文の中に引かれてゐる「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」を指すことは確実であるから、杜牧「早行詩」との比較では照応の度合の薄かった「小夜の中山」の語も、この羅山詩によれば訳なく結びつけ得るのである。

叙上、芭蕉はあらはには杜牧「早行詩」を引いたのであるが、実はそれと同時に羅山詩からも直接に詩想を得たことは疑はれない。

おそらく羅山詩が杜牧詩の投影下の作品である事は分りきってゐる上、杜牧詩の方が一層人口に膾炙して効果も大であるので、右の措置となったのであらう。この様に両詩との関係を考えると、芭蕉は俳文化するに当って実景実感の出る様に苦心してゐることは確かであるが、所詮この件りの根底は文学的虚構であると考へられるのである。[7]元来この件りは、杜牧「早行詩」以外にも先学の挙げられた漢詩類、又はそれに類似する詩句が多くあるが、ただそれらは詩中の一部が嵌るだけであって、詩全体又は大部分が嵌るのは杜牧と羅山のものぐらゐであらう。

林道春の『丙辰紀行』は、例へば浅井了意の『東海道名所記』との比較にも見られる如く、[8]後続文芸に影響を与へてゐる事が注目されてゐるが、近世の道中記類と中世のそれとを繋ぐ作品であり、旅を一生の栖とした芭蕉などもおそらく坐右の一書としてゐたと思ふ。芭蕉の紀行文等にはあまり露頭しないので見落されがちであるが、管見では赤羽学氏が引かれたのが注目される。[9]併しそれは芭蕉の旅程説明の中で、早天に小夜の中山越えする事を詠んだ伝統の一例として触れられたのみで、羅山詩が『野ざらし紀行』の小夜の中山の件りの文飾に影響を与へてゐる事や、又次の(四)節でも詳述するが「馬に寝て」句の持つ人生に対する感慨の面が、実は羅山詩句の「西行寿」によって示された「命なりけり」といふ西行歌に深くかゝはるといふ点などに及ばれてゐないのが残念である。

(四)

最後に残された問題は前述(二)節の⑪「茶のけぶり」に関してであるが、この語句を、頴原博士説を代表とする諸説の様に、芭蕉の創作とする説、[5]従って実景実感説に通ずる説のある反面、後述の桑原武夫氏や岡崎義恵博士の様に杜牧の「酔後題僧院詩」の結句の和訳とみる漢詩句借用虚構説[6]もあり、この他小西甚一博士の素材離れ説[10]やそれに影響を受けた付合説[11]もあるが、これらは虚構説に近い説である。

この漢詩句借用虚構説に触れる前に、和歌との関係の有無も一考されてよい筈であるが、まだなされてゐない様なので簡単に管見をしるしておきたい。

天理図書館綿屋文庫所蔵の一筆坊鷗沙自筆「蕉翁句解過去種」[12]には、標題句の頭註として、

当吟風雅集　光明峯寺入道前摂政左大臣〈茶の葉山さやの中山長き夜も仮寝の夢は結び残しぬ　此うたの心にも叶ひ待りぬ

を掲げる。もしこの通りの歌があるなら「茶のけぶり」は「茶の葉山」よりの連想で結合し、和歌虚構説が成り立つわけであるが、管見の限りでは風雅集の諸本にこの形はなく、

笹の葉のさやの中山なかき夜も仮寝の夢は結びやはする

とあるので、「茶の葉山」はもとより「残夢」の語さへも根拠を失なふ。風雅集より早く夫木抄でも

笹の葉のさやの中山なかき夜も仮寝の夢は結びかねつつ

とある。江戸期の俳諧注釈書の引用歌は、発句の解釈に都合よく合はせたと邪推したいものが多く、例へば「増註　桃青翁句彙」には

入る月をかなたの空とかへりみて夢路にこゆる小夜の中山

を引く。出典は不明であるが、もしこの歌が先行してあるものなら、改めて芭蕉の創作心理を再検討したくさへなる。ただ発想類似歌として、

明けば又行くべき道と思ひねの夢にぞこゆるさよの中山
（新続古今・法印義宝）

長き夜のさよの中山明やらで月に朝立つ秋のたび人
（新続古今・雅経）

があるから、綯ひ合はされて「句彙」の歌が合成伝承されたかも知れぬ。たとひ訛伝でも「過去種」や「句彙」の歌が存在すれば、芭蕉の目に触れ得る事もあり、それにより虚構したとも考へられるが、実証できない。他に

さゝの葉はさやの中山ふくかぜにおのれねぬ夜の夢もむすばず
（夫木・順徳院）

等もあって、小夜中山には、夜・未明・夢・早行等と結びついた歌が多いから、芭蕉がかういふ伝統を活用して、この件りを綴った事は認めてよいかと思ふが、「茶のけぶり」そのものを和歌から導く事はやはり無理な様である。

「茶のけぶり」は『野ざらし紀行』の何回かにわたる推敲過程の中、最後まで棄てられなかった句（他に「残夢」もさうである）で重要な語句であったことが分るが、この句については、桑原・岡崎両氏説の様に杜牧の「醉後題僧院詩」によるものとみるのが一番素直ではなからうか。（もっともこれには反対説もないわけではないが。）[13]

この詩は東坡等にも影響を与へ、我が五山の詩僧にも継承された詩であるが、次の通りである。

舷船一棹百分空　十歳青春不負公
今日鬢糸禪榻畔　茶烟輕颺落花風

これについて、桑原氏は「『茶の煙』というのも私の考えによれば、同じ杜牧の『醉後題僧院』という詩の中の『茶烟輕颺落花風』から出ているのであろう。この詩は『唐詩選』にものっている有名なものだから、芭蕉は知っていたにちがいない。必ずしも彼が茶を煮る烟を眼前に見る必要はなかった。そしてこの句は、テニヲハ以外の文字はすべて漢詩のものと全く同じである」と言はれ、岡崎博士も、『「茶烟」というものも漢詩や禅の方にあるもので、必ずしも俳味だけにあるものともいえない。杜牧の『題禅院詩』に『舷船一棹……』というのがあって『鬢糸茶烟之感』という成語が生じ、少年の時には嬉遊に耽った者が、老いて淡白な余生を送るという意に用いられている」と述べて居られる。

ところで「茶のけぶり」には又別の解がある。即ち小西博士は、栄西の『喫茶養生記』の桑粥法を引用して、唐床詩の煎茶・茶煙は桑粥で、これが未明に煮られるところから鶏鳴・残夢等と連想を持つが、芭蕉の「茶の煙」は桑粥であり得ないから「モードからいえば描写型であるけれども素材としての事実から少からぬ『離れ』がある」[14]とされる。又諸家の多くは、朝に茶を煮る煙とされるが稀には茶を焙じる煙とする説[15]もあり、或いは朝食を炊ぐ煙とみる説、さらには禅院での場合は茶釜から上る湯煙とか、茶碗より立ちのぼる湯気等も考へ得る。遠州は茶産地ではあるが、[16]炊煙とか朝茶を煮る煙と考へれば、その煙の立つのは遙か遠方に見える村里であらうし、未明のほの暗くて物の見え分ち難き頃でもあるから、実際の視覚に映じたものとするよりも心象風景的な面が強く感ぜられる。焙茶の煙なら嗅覚によって気づくのだから、視覚の場合よりも煙の位置は作者に近い筈であるが、一句から受ける遠景感にそぐはぬ感じがする。「月遠し」も、遠い月であるとともに私には「残夢」の内容と

しては遠き過去の頃であり、「茶のけぶり」も又遠いといふ印象を拭ひ去り得ないのである。[21] この句は初案の「残夢残月茶の烟」が斯く改められたものであるが、その「残夢・残月・茶の烟」の三つは、いづれも芭蕉にとって遠きものであったらう。「要するにこの句は中国詩と現実との渾融した世界」[17]だといふ見解も、この様な心象風景と受け取り得る所から出てくるのであらう。

おそらく「茶のけぶり」はたとへ嘱目の具象的風景を借りたにせよ、やはり心象風景の描写といふことをぬきにしては考へられないのではないか。『野ざらし紀行』は純粋叙景句よりも心情表出句の方が多いといふこともこの際参考としてよいであらう。

かう考へてくると、「茶のけぶり」といふ語句は、「酔後題僧院詩」に基づきつつ、その詩によって成語となった「鬢糸茶烟之感」といふ語の意味する、少年と老年の日の対比より生ずる心象を風景を借りて描き出したものであると考へるのが適切であると思はれるのであるが、併し私は標題句と「酔後題僧院詩」とを繋ぐものは、単に「茶烟」だけではなく更に次の箇所でもあることを考へる必要があるやうに思う。

それは「酔後題僧院詩」の承句「十歳青春不負公」との関連によるのであって、これは「(ふりかえれば過去)十年の青春の間、自分の思う事にそむかなかった」といふ意であるといふ。[18] だとすれば貞享元年『野ざらし紀行』の旅に出た時の芭蕉は四十一歳で、所謂初老と称せられる年齢であった事が想起されるからである。その約十年前、二十九歳で江戸へ出て以来、彼は「自分の思う事」、即ち俳諧の道ただ一筋につながって生きてきた事を貞享四・五年の『笈の小文』の旅の記録の冒頭に言明してゐる。そして更に重要な事は、この一筋に生き抜いて今では江戸を故郷とまで考へる様になった事を、『野ざらし紀行』の出立の句「秋十とせ却て江戸を指故郷」に明白に表出してゐる。だからこの「秋十とせ」句と「馬に寝て」句がともに杜牧のこの「酔後題僧院詩」にヒントを得た一対の句であると考へられれば好都合なわけであるが、草稿的な矢橋家資料[19]では、出立の二句「野ざらしを」「秋十とせ」にすぐ引き続いて「馬に寝て」の句（その形は「馬上落ンとして」であるが）があるのであるからこの推定は無理ではないのではなからうか。なる程「秋十とせ」句は従来指摘されてゐる様に、賈島の

客舎幷州已十霜　帰心日夜憶咸陽
無端更渡桑乾水　卻望幷州是故郷

の詩に全面的に依拠してゐる。併しそれはより多く修辞的であって、青春の日の回想と現在の心境吐露といふ面に於ては、「酔後題僧院詩」に依ってゐると見るべきではなからうか。

以上のやうにして標題句には、芭蕉に於る昔日の青春の回想と現今の老境の感慨を表はした心象風景が根本にあるとするならば、一歩進めて、そこには同時に西行の「命なりけり」の歌が強く作用してゐると見るべきではなからうか。西行のこの歌は、やはり若き日と老年の今日とを対比するところに生ずる強い感懐を表出するものであったからである。もとよりそれは西行歌露呈句ではなく、従って西行歌とを直線的に結びつける理由はないが、中間に「酔後題僧院詩」を介在させ、又地の文の「小夜の中山」といふ語句とを繋ぎ、更に㈠節で述べたやうな『野ざらし紀行』全体にあふれる強い西行敬慕の情を合はせ考へる時、この考へ方は十分成り立つやうに思はれる。寧ろ西行の歌を想起しない方が不思議と言ってもよいであら

う。私はここに至って芭蕉の構想の如何に深遠で屈折的であったかに一驚せざるを得ないのである。西行敬慕の念は一見さあらぬ体に見えながら、深所に於て強く息づいてゐたのであり、又この紀行の初原、草稿当時の構想中に萠芽してゐた事は、同じく矢橋家資料に、西行谷の一句が含まれてゐる事からも明らかであらう。[19]

かく考察する時「杜牧が早行の残夢」とは普通「かの杜牧の早行（朝早く旅立つ）の詩にいう夢のなごりの心地」[20]と解されて、「早行詩」の「残夢」をさすものとせられてゐるが、それは表面的な解釈にすぎない様に思ふ。そして又内容的には嶮路の苦難の夢ぐらゐに見られ易い所であるが、自分は以上の如き考察の結果、芭蕉が馬上で見残した体にした「残夢」とは、「秋十とせ」の句と密接にからみ合って、それらの背後に「十歳青春不負公」の「酔後題僧院詩」と「年たけて」の西行歌を負ったもの、即ち若き日の俳諧に対する我ながらいとほしきまでの執心の夢であったと思ふ。「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」のあの夢とほぼ等質の夢であったと思ふ。残月だけが遠いのではなかった。自分を顧みての斯様な現在の思ひも、又遠く月の彼方に眺められるものではなかっただらうか。[21]その残夢から忽ち驚いての「茶のけぶり」とは、今日初老の段階の感懐であり、「野ざらしを心に風のしむ」わが身へのひきしまる様な感慨であった筈である。

心象風景的には、馬上にうとうとしつつ、朦朧たる意識のもとに、有明月が淡く遙かの西空に傾き、その下の民家から煙の立ちのぼる景と考へ得るであらう。併しそれらは所詮漢詩によって虚構せられた風景であり、同時に西行歌に依って貫かれた人生詠嘆の心であったと思ふ。

註

（1）岩波文庫「芭蕉俳句集」により延宝四年作とみる。この他諸書も延宝四年作とみるが、宇和川匠助氏「野ざらし紀行の解釈と評論」では、野ざらし紀行よりも後年の作とする（同書36頁12行目）

（2）天理旧菊本本は、岩波文庫「芭蕉紀行文集」や弥吉菅一氏「芭蕉の俳諧的紀行文の成立過程（学大国文第10号）」などで初稿として取り扱はれてゐる。

（3）例へば、岩波書店・日本古典文学大系「芭蕉文集」や小学館・日本古典文学全集「松尾芭蕉集」の頭註等。

（4）「小夜の中山」と「早行詩」とを結びつけようといふ努力もなされなかった訳ではない。例へば「早行の残夢が、夜の名のある小夜の中山で醒めると言いなした所が俳諧（小学館「松尾芭蕉集」頭註75頁）」といふ説などがそれであるが、㈢節で述べる羅山詩によって論証できるほどには説得性があるとは言へない。又『野ざらし紀行』の行程よりみて、芭蕉が小夜の中山を通過して行った事は事実と認めない訳にはいかないが、果してこの件りで述べてゐる様な状態で通過したか否かは疑問である。後註に引く矢橋家資料の如き草稿的なものによれば、この句と「小夜の中山」との結びつきは見出されないのである。

（5）穎原退蔵博士「芭蕉俳句新構（下巻）」・山本健吉氏「芭蕉（上巻）（新潮文庫）」・南信一氏「三冊子総釈」等。

（6）桑原武夫氏「芭蕉について（同氏全集3所収）」・岡崎義恵博士「芭蕉の芸術（同氏著作集6所収）」中の「発句抄」。詩は㈣節に示す。

（7）南信一氏前掲書・安東次男氏「新版芭蕉その詞と心の文学」中の「残夢」・小西甚一博士「鴨の声ほのかに白し（文学第31巻第8号）」・伊藤博之氏「芭蕉における詩の方法（文学第35巻第3号）」等に引用された漢詩句。

（8）岸得蔵氏「『道中記』『丙申（ヤマ）紀行』『東海道名所記』（静岡女子短期大学紀要・第6号）」。

（9）弥吉菅一・赤羽学・檀上正孝氏共編「野ざらし紀行・鹿島詣」中の赤羽氏「『野ざらし紀行』の旅程（63頁）」。

（10）小西氏前掲論文。

（11）小学館「松尾芭蕉集」の頭註（75頁）で「炊煙を茶の煙としたのは『寝覚―茶』の縁によるあしらい。『寝覚―茶』の連想は宋代の漢詩に多く、俳諧でも『毛吹草』で付合とされている」とある。

（12）「一筆坊」の名を頷かせる特異な筆勢の書で春夏秋冬の大型四冊本。序によれば芭蕉発句八百五十余句を季題別に分類して、それに筆者が脇句をつけたもの。安永五年成稿。芭蕉の句に頭註をつけてゐるが、すべての句に亘って註してゐない。

（13）宇和川氏前掲書中の説。

（14）小西氏前掲論文。

（15）鈴木棠三・広田栄太郎両氏編「故事ことわざ辞典」の「鬢糸茶烟の感」項。

（16）前掲赤羽氏・宇和川氏の説により、芭蕉当時から遠州を茶産地とみる。

（17）前掲南信一氏の書中の見解。

（18）岩波書店・日本古典文学大系「五山文学集江戸漢詩集」の補註（408頁）。

（19）『野ざらし紀行』の初原的草稿と目されるものに矢橋家資料がある。「連歌俳諧研究（昭和38年7月号）」に阿部正美氏が紹介され、弥吉菅一氏も天理旧菊本本（初稿）よりも以前の草稿的なものとする見解に賛成された。今、弥吉氏の前註引用論文に引かれたものから再転載する。「／」は改行を示す。

旅立

野晒を心に風のしむ身哉

秋とゝせ却而江戸を指故郷

夜深に宿を出て／明んとせし程に杜牧が馬鞍の吟をおもふ

馬上落ンとして残夢残月

茶の烟

途中捨子を憐

猿を（啼泣）旅人

捨子に秋の風いかに

伊勢山田西行谷ニ／あそふ途中の□（即か）事

芋洗フ女西行ならば

哥よまん

（20）前掲岩波書店「芭蕉文集」頭註。

（21）「月遠し」といふ語に、若き日々を回想して老境のわが身を思ふといふ余情があるとする私の印象の、その理由は西行の「ふけにける我が身の影を思ふ間にはるかに月の傾きにける（新古今・雑上）」といふ歌があることにもよる。

（大阪府立勝山高校教諭）